

失われた未来 〈2〉

抑圧と回帰— "A Rose for Emily" における家父長制幻想 —

森 有 礼

I

William Faulkner の小説は、南北戦争後のアメリカ南部を舞台として、人種、階級、性差に纏わる諸問題を扱っている。それらにおいて、南部の「現実」は、例えば *Absalom, Absalom!* (1939) において典型的に示されているように、南北戦争において南部を敗北に導いた神の呪いとして、南部の人々、特に白人に対して齎されたものとされており、同時にそれは旧南部の白人貴族階級にとっての「他者」— 黒人、新興階級、女性（特に性的に墮落した女性の罪）— によって表象される、共同体の罪であり宿命であった¹。Faulkner に特徴的なのは、一つにはこうした他者を前提とすることで、現実の南部に対する架空の「あるべき姿」、本来実現されるべきでありながら「失われた未来」を想定することで南部の敗北と衰退を合理化する姿勢であり、一方では南北戦争以前の所謂旧南部を理想化することで、自身のイデオロギー性に対して無自覚を装う態度であった。

だが Faulkner の描くこうした自己韜晦的な態度には、時として南部白人社会自体が内包するイデオロギー的な核が垣間見える。敗戦後の南部を失われた未来の代理物と見做し、その原因を他者に帰するという一種の合理化を通じて、John. H. Miller が指摘する所謂「南部イデオロギー」に基づく架空の現実を所与のものとして構築する正にその過程に、この仮想現実と実際の南部との齟齬が露呈するのである²。

本論は精神分析的見地から、こうしたイデオロギー的な抑圧と、そこに抑圧されたものの回帰の主題を通じて、"A Rose for Emily" (1930) の再読を試みる。具体的には、Faulkner の南部が常に/既に一つのイデオロギー的虚構であることを指摘し、その虚構を支えている他者としてこの作品の主人公 Emily Grierson を捉え直す。その上で、Emily をこうした虚構としての南部の家父長的共同体の犠牲者と見做す視点を更に推し進めて、彼女は物語世界における実在の登場人物というよりも、寧ろ共同体の「失われた未来」という物語を作り上げるために機能するイデオロギー的核としての機能、即ち、彼女なしには南部の虚構は存在できないが、物語世界においては決してそのイデオロギーの内部に取り込まれきれない特異な存在として再定義することで、そのイデオロギー性を前景化することを目指す。

II

"A Rose for Emily" の粗筋は、およそ次のように要約できよう。南部の田舎町 Jefferson の旧家に生まれ、厳格な父の束縛の下で 30 歳を過ぎるまで独身のまま過ごしてきた南部貴族 Grierson 家の一人娘 Emily は、父の死後街に現れた北部人の道路建設作業員 Homer Barron と遅い恋に落ちる。二人の醜聞が街の人々に広まった後、Emily は自分を捨てようとした Barron を殺鼠剤で毒殺し、自宅の寝室にその屍体を隠したまま死んで行くが、彼女のこの生涯に亘る秘密に対する好奇心に駆られた街の住民は、葬儀の終わった Emily の屋敷に押入り、そこで Barron の変わり果てた姿を発見する、というものである。

こうしたスリラー仕立ての構成と相俟って、この作品に関しては、しばしばそのグロテスク性やゴシック小説的特徴が強調されてきた³。また物語の舞台アメリカ南部と主人公の Emily とを関連付けて、旧南部の神話とその衰亡という文脈の中で、旧南部から新南部へという時の推移や、南北戦争以前から続く南部と北部との根深い対立等の主題を読み取る批評も多い⁴。この種の議論は、例えば Cleanth Brooks と Robert Penn Warren に窺えるように、Emily を "a combination of idol and scapegoat for the community" (27) と捉え、彼女を時の推移と変わり行く社会の犠牲者と見做す理解へと繋がるという意味では、女性に対して抑圧的な南部の家父長的社会に対する批判とも言えよう。

だがこうした読みは、本短編のグロテスク性を単に Emily による愛人 Homer Barron 殺害と短絡させるような批評的硬直に陥ることにもなりかねない。例えば Emily の「犯罪」の原因をエディプスコンプレックス克服の失敗に帰する Jack Scherting や、彼女を一種の精神病患者と見做す Brooks と Warren 等の議論は、彼女を「狂女」として範疇化することで結果的に彼女の持つ問題を理解することを断念することになってはいないだろうか。一方で、Emily を安易に何らかの象徴や隠喩と見做す読みも拙速に過ぎはしないだろうか。

無論、本作が南部プランテーション貴族社会の伝統に則った家父長制と密接な関係を持っていることは間違いない。本短編の本質を "a story of the patriarchy North and South, new and old, and of the sexual conflict within it" (50-51) と指摘する Judith Fetterley によれば、Emily は "a man-made object, a cultural artifact, and what she is reflects and defines the culture that has produced her." (51) 以外の何者でもない。Fetterley は次の一節の中で、こうした南部家父長制の女性に対する暴力的な抑圧を看破する。

What is true for Emily in relation to her father is equally true for her in relation to Jefferson: her status as a lady is a cage from which she cannot escape. To them she is always *Miss Emily*; she is never referred to and never thought of as otherwise.... And because she is a lady, the town is able to impose a particular code of behavior on her ... Emily is indeed, anything and everything but human. (52-54)

ここに窺えるように、南部家父長制は女性に適当な社会的性役割（つまり、婚姻以前の処女即ち淑女、婚姻後の妻、婚姻を前提としない売春婦及び婚姻しない未婚婦人の何

れか)を強要すると共に、それからの逸脱を禁じる抑圧装置として機能している (John N. Duvall 119-32)。こうした視点に立ち、Fetterley は本短編を "the story of a lady and of her revenge for that grotesque identity" (51) と定義する。Fetterley のこの指摘は、南部の家父長的社会が Emily に強要する「淑女」というステレオタイプを通じて、本短編の「グロテスクな」本質を南部の「文化的神話と文化的現実との不均衡」(57)として暴き出す。

次節以降ではこうした Fetterley の主張に基づき、"A Rose for Emily"において Emily が果たす役割に着目して、精神分析的見地から彼女と南部の家父長制との関係を検証する。まず南部家父長制における女性の抑圧が、旧南部世界のイデオロギー的準拠の前提を成すと共に、それを支える不可欠な要素であることを確認する。続いて、「抑圧された女性と彼女による男性への復讐」という本編の物語的理解に替わる新たな読みの可能性について、特に Emily を南部家父長制の被害者という「リアルな存在」として捉える従来の解釈から離れ、彼女をテキスト内部における排除=抑圧の記号、即ち物語世界における家父長的共同体に内在する抑圧の「症状」と見做すことで、この家父長制それ自体が、Emily によって支えられた南部の神話的幻想に過ぎないことを示したい。

III

"A Rose for Emily" は、一見すると典型的な推理小説の形式を採っている。物語中に仄めかされる、Emily の屋敷の異臭と Homer Barron の行方を巡る謎は、その結末で、Emily が Barron を毒殺し、その遺骸を隠し続けてきたことが示唆される形で解決する。この物語を語るのは、現在と過去とを行きつ戻りつ Emily の生涯を読者に紹介する「我々 (we)」という語り手である。この語り手は、物語の舞台である Jefferson の街の住民の、Emily に対する好奇の視線を代表すると共に、読者の視点とも重なっている。この点について、Fetterley の以下の指摘を参照することで、Emily が「窃視症的な」語り手達の「絶え間ない注視の対象」として消尽される存在であることを確認しておこう。

Indeed, though she shuts herself in a house which she rarely leaves and which no one enters, her furious isolation is in direct proportion to the town's obsession with her.... [Emily] is *the object of incessant attention*; her every act is immediately consumed by the town for gossip and seized on to justify their interference in her affairs. Her private life becomes a public document that the town folk feel free to interpret at will ... Her funeral is not simply a communal ceremony; it is also the *climax of their invasion of her private life* and the logical extension of their *voyeuristic attitude toward her*. Despite the narrator's demurral, *getting inside Emily's house is the all-consuming desire of the town's population*, both male and female; (51, 強調は論者)

Emily に注がれる、「彼女の家の中を見」ようとする、「全てを消尽するような街の住民の欲望」の視線にはジェンダー的偏向が認められる。物語の最後で彼女の寝室に押し入る群集同様、それが Emily の「秘められた内部」を暴き立てようとする欲望を暗

示していると言う意味で、この視線は強い性的含意を持つと共に、明らかに暴力的でもある。

この点についても、Fetterley の "The narrator, looking through a patriarchal lens, does not see Emily at all but rather a figment of his own imagination created in conjunction with the cumulative imagination of the town." (54) という指摘を確認しておきたい。ここで重要なのは、「家父長制のレンズ越しに眺める」語り手の視線が実際に見ているのは Emily ではなく、「街の想像力と一体となって創られた自身の空想の産物」に過ぎないという点である。この意味で、Jefferson の人々の「空想の産物」として語られる Emily は、言わばその「欲望が投影される一種のスクリーン (a kind of screen for the projection of desires)」(Žižek 8) となっている。Emily を通じて、街の人々は自身の欲望を一種の幻想として具体化しているのであり、一方こうした役割を負わされることで Emily は、見る者が望むものを映し出すスクリーンという、純粹に表層しか持たない存在となるのである。

こうした街の人々の「想像的 (imaginary)」な視線が Emily を恣意的に理想化する一例が、本編最終章における、彼女の葬儀の参列者のノスタルジックな空想である。

[T]he very old men--some in their brushed Confederate uniforms--on the porch and the lawn, talking of Miss Emily as if she had been a contemporary of theirs, believing that they had danced with her and courted her perhaps, confusing time with its mathematical progression, as the old do, to whom all the past is not a diminishing road but, instead, a huge meadow which no winter ever quite touches, divided from them now by the narrow bottle-neck of the most recent decade of years. (129)

旧南部連合の制服を身に着け、彼女に求婚したと夢想している老人達にとって、Emily は彼等が実際に生きた現実の過去ではなく、それを牧歌的に理想化した幻想、つまり彼等の幻の過去を支える「淑女」Emily という想像的な虚像に過ぎないことは明らかである。

この時 Emily は、Jacques Lacan の「女は男の症状である」という主題の例証となっている。Juliet Mitchell と Jacqueline Rose は、Lacan の「欲望の対象 *a*」という概念を用いてこの主題を次のように説明する。

[T]he central term is the *object small a* [*objet a*], Lacan's formula for the lost object which underpins symbolization, cause of and 'stand in' for desire. What the man relates to is this object and the 'whole of his realization in the sexual relation comes down to 'fantasy'. As the place onto which lack is projected, and through which it is simultaneously disavowed, woman is a 'symptom' for the man. (48)

この定義に従えば、Emily は語り手達の欲望の対象、その「欲望の代理表象でありその原因でもあるという、象徴化を裏打ちする失われた対象」として機能している。つまり彼女は、その上に「[見る者の]欠如が投影されると同時に、彼女を通じてこうした欠如 [つまり見る側が何か欠如されているという事実] が否定される」様な特異な位置

を占める。

同時にこうした機能を果たす限りにおいて、Emily は物語世界内における「見る者」とは根本的に異なった審級に属する存在となっていることも看過してはならない。"A Rose for Emily" は Jefferson と Emily との物語ではあるものの、そこには一方的に Emily を見る側に立つ住民と、見られる対象でしかない Emily との非対称的な関係がある。この意味で、Emily は住民の側に物語を提供しこそすれ、彼等の共同体には決して参入しない。彼女は寧ろ、そこから排除されることによって、またそうすることでこの共同体の抱える欠如そのものを表象する。こうして「男の欲望の対象/原因」として機能する限りにおいて、Emily はとなる。彼女は語り手達「見る者」の抱える欠如の否認の印、彼等の抱える症候となるのだ。先に挙げた Lacan の「女は男の症状である」という主題は、Emily がこうした「欲望の対象」であることを表しているのだ。

ところで、ここで症候を巡る議論を更に進めるために、Freud による「症状」の定義を確認しておきたい。Freud は症候について、次のように説明している。

[T]here is an inseparable relation between this act of the symptoms being unconscious and the possibility of their existing.... [E]very time we come upon a symptom we can infer that there are certain definite unconscious processes in the patient which contain the sense of the symptom. But it is also necessary for that sense to be unconscious in order that the symptom can come about. Symptoms are never constructed from conscious processes; as soon as the unconscious processes concerned have become conscious, the symptom must disappear.... The construction of a symptom is a substitute for something else that did not happen." (*Introductory Lectures on Psychoanalysis* [以下 *Introductory* と略記] 320)

症状とは、無意識的過程において表れなかったものの代理物である。同じく Freud の "it is not the repression itself which produces substitutive formations and symptoms, but that these latter are indication of a *return of the repressed*" ("Repression 154") という指摘に従えば、症状とは、患者の無意識的過程において「抑圧されたものの回帰の指標」に他ならない。更に Freud は "[A] neurosis would seem to be the result of a kind of ignorance--a not knowing about mental events that one ought to know of." (*Introductory* 321) と述べている。こうした定義に従えば、症状とは自身の無意識的抑圧に対する主体の無知、つまり主体が、自身の意味作用の枠組から排除された何かの存在に気付かないという事実を示す、言わば「無意識の知」（或いは Lacan 的に言えば、欲望の対象という名の「欠如に対する認識の欠如」）と考えてよい。

この意味で、「女は男の症状である」とは、女性がこの「見つめる男」自身の無意識の抑圧、つまり自分自身にとっての「欠如に対する認識の欠如」の記号だと言うことを意味する。Emily が果たすのは、こうした自己に対する無知=欠如を補完するために、男の眼差しの対象となることでその幻想を引き受けることであるが、同時にそれはこの無知=抑圧の存在を、分析者である読者に示すこととなる。この意味でも、Emily は物語

世界内における実際の登場人物として捉えられる存在ではなく、寧ろ彼女という対象=欠如を眺め、そこに自身の欲望の幻想を見出す Jefferson の、延いては読者の抱える抑圧の指標として理解されるべきなのだ。

こうした記号として Emily を捕え直せば、彼女が第四章で "Now and then we would see her in one of the downstairs window ... like the carved torso of an idol in a niche, *looking or not looking at us, we could never tell which.*" (128、強調は論者) と形容される理由も理解できる。この「こちらを見ているかどうか分からない」という一節には、語り手達の視線の本質的無知、つまり「対象を見ていながらその意味が分からない」という、「無意識の知」を表している。では、この「男の視線」が抱える「地の欠如」とは何か。それを論じるため、次章ではこの Emily の父の死に纏わる謎について考察したい。

IV

実は "A Rose for Emily" では、Emily の父の死がどのようにして街の人々の知るところとなったのかは明らかにされていない。第二部の終わりで Emily の家を訪れる弔問客達は、頑なに父の死を否定する彼女を説き伏せて父の遺骸を埋葬させるが、奇妙なことに、訪問に先立って彼の死が街に報じられる場面も、そうした告知を示唆する描写も作中には見つからない。同様の疑問は、本短編結末部にも窺える。Emily の死後、それまで誰も足を踏み入れたことのない彼女の屋敷の寝室へ乱入する人々は、恰もそこに Homer Barron の遺体が隠されているのを知っていたかのように振舞っている。こうしたプロット上の因果関係の齟齬を Faulkner の誤謬と見做すことは簡単だが、本論ではそれを、先に挙げた南部家父長制の「無意識の知」に起因するものと見做したい。

今挙げた二人の男性の死は、語り手達にとっては論理的に見て知り得ない筈の事実である。それは、"A Rose for Emily" における合理的な物語的説明に生じた一種の論理的欠如と言える。一方で、誰も知り得ない筈の父の死が、「弔問客の訪問」という形で当然のように語られているという意味では、この欠如はインフォーマントなき情報という「過剰」とも呼べる。我々読者がここで対峙しているのは、知らない筈のことを知っているのに、何故それを知っているのか分からないという、相矛盾する状況なのだ。

こうした矛盾を内包する「無意識の知」への手掛かりとなるのは、Freud が *Introductory* の 12 章で紹介する夢である。この夢はかなり昔に父を亡くした息子が、その亡父について見た夢であり、それは被分析者である息子によって次のように語られる。"His father was dead but had been exhumed and looked bad. He had been living since then and the dreamer was doing all he could to prevent him noticing it." (223)

この夢について Freud は、長患いに苦しみ、そのために大きな経済的負担となっていた「厄介な父」の死を無意識に望む息子の願望であるとした上で、この「既に死んでいると同時に生きており、自分が死んでいると言うことに気付かない父」の夢を、自慰行為に関する罪悪感と去勢恐怖の表れと解釈する。

だがこうした「死んだ後も生き続ける父」、肉体が滅んだ後も遣された者を支配し続

ける存在は、*Light in August* の Hightower の祖父や *Absalom, Absalom!* の Thomas Sutpen を挙げるまでもなく、Faulkner において重要なモチーフである。それは Freud が *Totem and Taboo* で指摘した、文化的禁忌の起源に存在する絶対的な「死父」、つまり「父の法」の厳然たる存在である (203-05)。

「父の法」の本質は、父の死を望みつつ、その願望故にこの「父の死」を否認し、「父の法」の失効を恐れるという、残された側の両義的感情に根差す。"A Rose for Emily" における家父長制とは、こうした両義的感情が齎す幻想であり、この幻想の発端、その起源にある「死父の死」こそが、「淑女」Emily という家父長制の表象、つまり Jefferson の「無意識の知」を示す「症状」を形成しているのである。

この「父の法」は、"A Rose for Emily" 第二章の以下の引用に窺えるように、Emily を外界から遮断し束縛／保護する、彼女の厳格な父の姿を採って描かれている。

We had long thought of them [Emily and her father] as a tableau, Miss Emily a slender figure in white in the background, her father a spraddled silhouette in the foreground, his back to her and clutching a horsewhip, the two of them framed by the back-flung front door. (123)

彼は生前 Emily と、彼女への求婚者達とを隔てる障壁であったが、"[T]hat quality of her father which had thwarted her woman's life so many times had been too virulent and too furious to die." (127) という一文が表すように、その影響力は死後も彼女を束縛し続ける。だがこうした一見抗い難い「父」の支配は、実は Emily に対してではなく、寧ろ Jefferson の人々にとってこそ問題となる。何故なら、正にこの死父の権威の基盤をなす家父長制イデオロギーが、奇矯ともいえる Grierson 一族の「特定の行動規範」を保証する限りにおいて、また同時にそうした「特定の行動規範」に裏打ちされた Emily の「淑女」としての特異性がこの家父長制イデオロギーの幻想を保証する限りにおいて、人々は Emily という「症候」を維持しうると共に、その奥に抑圧された無意識の知という現実と対峙せずすむからだ。

一方で、こうした特異な家父長制的寛容に護られた Grierson 家の末裔に対する、街の人々の抵抗らしきものも作中には窺える。例えば第二章で、Emily の父の死を密かに寿ぐ Jefferson の住民は、意地悪くも父の死が齎す窮乏に Emily が身を窶し、その困窮の中で彼女が「人間らしく」なることを期待する。

When her father died, it got about that the house was all that was left to her; and in a way, people were glad. At last they could pity Miss Emily. Being left alone, and a pauper, she had become humanized. Now she too would know the old thrill and the old despair of a penny more or less. (123)

また第一章で Emily に納税を求める使節団と Emily との対立や、Emily の屋敷の異臭騒ぎの際に見られる Steven 判事と「若い世代」との見解の食い違いも、世代間の価値観のずれを暗示している。旧南部の規範に縛られない新たな世代は、Emily に、父の死を契機として、彼等の理屈に沿った新たな行動規範、即ち新しい社会という象徴的ネッ

トワークへの参入を要請しているようであるが、それは旧南部という「父の法」の解体を通じて、Emily が過酷な現実に屈することを待ち望む、「街」の側の残酷な享樂の表れにも思える。

しかし、語り手達「街の人々」が期待するような変化は Emily に訪れない。父の死後も、彼女は依然として超然たる「父の法」の支配下にあるようだ。例えば北部人の日雇い労働者 Homer Barron と共に馬車で街を行く Emily は、単なる "a disgrace to the town" (126) ではない。"She carried her head high enough--even when we believed she was fallen. It was as if she demanded more than ever the recognition of her dignity as the last Grierson;" (125) と描写される Emily の様子には、Jefferson の人々が「彼女は墮落した」(125) と見做し、彼女を蔑みつつ哀れむ時ですら、依然として南部家父長制を象徴する Grierson 家の最後の一人としての威厳、つまりこの父の法の残滓が窺える。

こうした Emily の態度を、南部家父長制という「死父」の死の承認を強要する Jefferson に対する、旧南部側の抵抗の象徴と見做すことは勿論可能であろう。だが彼女の存在が、一方では本編の家父長制幻想を支える欲望の対象であり、また彼等自身の幻想の産物でもあることを鑑みるならば、Emily と Jefferson とのこうした対立は南部家父長制が内包する自身の矛盾をも表している。何故なら、この対立は南部自身のイデオロギー的抑圧=症候を自己破壊的に解消しようとする試みに他ならないからだ。

こうした両者の拮抗は、Homer Barron の失踪の後も続く。例えば街の無料郵便制度が布かれた際に、Emily が「表札と配達箱 (the metal numbers ... and a mailbox)」(128) の設置を拒否し、その結果毎年末に送られる納税通知書が「受取人不明 (unclaimed)」(128) のまま戻ってくるというエピソードは、彼女が移り行く Jefferson の「新しい世代」の象徴的ネットワークの内部には最早位置付けられていないという事実、つまり生存こそすれ、社会的には既に「存在しないも同然」であることを暗示している。先に Emily の父は、肉体の死と、社会的・象徴的な死という「二つの死の間」で生き続けていること、即ち個人としての死を経て、尚「父の法」という象徴的秩序として機能し続けていると指摘したが、それと対照的に、Emily は新たな世代のネットワークの中に自分の存在を持たないと言う点において、やはりこの「二つの死の間」にある。新しい世代の間で忘れられてゆく彼女は、「肉体はまだ生きているのに、実質的には死んでいる」という相矛盾した状況にあるのだ。

従って彼女の葬儀は、既に社会的には「失われた」存在の「喪失」を象徴化する儀式、つまり「喪失の喪失」を齎す行為となる。ここで注意したいのは、先に言及した、参列者達が Emily を牧歌的な過去の幻想として理想化する場面が、Emily の実際の「死」と等しい点だ。葬儀の当日、現実の彼女が「永遠に (for good)」(128) 失われる正にその瞬間に、Emily を巡る幻想は完成する。この意味で、Emily の死、つまり彼女が現実の世界から根本的に排除されることが、南部の家父長制幻想を完成させるためには不可欠なのだ。

ここで、Emily が先に述べた「二つの死の間」の存在であったことを思い起こせば、

彼女の葬儀を執り行うことは、Freudの言う「喪の行為」、象徴的ネットワークにおける彼女の位置（の不在）を確定することであるだけでなく、彼女がJeffersonに対して表象/代理してきた「父の法」という幻想そのものの喪失が明らかになることでもある。では、Emilyという幻想のスクリーンを失って、Jeffersonが直面するのは何か。これについて確認する前に、Emilyの父の死について、もう一つ簡潔に触れておきたいことがある。

V

実は彼の死は、前節に挙げた "A Rose for Emily" 第二章末の描写以外にも、第一章で、Emilyに対するSartoris大佐の終身免税措置に言及する際の、"the dispensation [to remit her taxes] dating from the death of her father on" (120) という一節と、第二章の冒頭で "That was two years after her father's death and a short time after her sweetheart ... had deserted her." (121-22) と語られる際とに触れられているが、いずれの場合も、どのようにして語り手達はその事実を知ったのかは説明されない。だが逆にこの短編の中で、冒頭から父の死が言及されているという事実が重要なのだ。何故なら、こうした「口が滑った」かのような「失錯行為 (parapraxes)」自体が、読者にこのテキストの「無意識の知」を繰り返し暗示していると考えられるからである。Freudは失錯行為の典型である「言い間違い」を例に引きつつ、"*The speaker decides not to put [the disturbing purpose] into words, and after that the slip of the tongue occurs: after that, that us to say, the purpose which has been forced back is put into words against the speaker's will ...*" (Introductory 92) と述べる。

Freudは言い間違いを、人を当惑させるような何かが抑圧された時に生じる現象と定義する。この定義に従えば、"A Rose for Emily" は、言い間違いに隠された「無意識の知」、抑圧された語り手の意図を呼び起こす契機となる分析的物語を提示しているとも見做せる。

常識的に考えれば知りようのない筈の出来事が、繰り返し語り手の口に上るというこの事実こそが、父の死に纏わる根本的な抑圧を示唆している。この物語において語ることを禁じられているのは、従って「父の死は既に周知の事実である」ということを誰もが知っているという「無意識の知」であり、同時にこの抑圧された「無意識の知」が示唆するのは、語り手達が如何に雄弁にその不死性を語ろうとも、この事実はその試みに反して繰り返し言及されずには済まないという厳然たる現実なのだ。このことを確認した上で、この短編のクライマックスへと進もう。

Jeffersonの住民がEmilyの葬儀に参列したのは "curiosity to see the inside of [Emily's] house" (119) からである。だがこうした「好奇心」と共にEmilyの葬儀を見守る住民達は、先に述べた「無意識の知」に衝き動かされているかのようなのである。"*Already we knew that there was one room in that region above stairs which no one had seen in forty years, and which would have to be forced. They waited until Miss Emily was decently in the*

ground before they opened it." (129, 強調は論者) という一節に窺える確信めいた「二階の一室」への執着は、Emily の寝室へと街の「彼等 (They)」を導く。そこで人々が最後に対峙するのは、婚礼の床に横たわる朽ち果てた Barron らしき屍体と、彼と Emily との同衾を仄めかす "a long strand of iron-gray hair" である。Emily という「症状」の喪失と関連付けるならば、彼女によって妨げられていた「無意識の知」とは、この最終場面における寝室の内部に他ならない。この場所への侵入を、「葬儀の列席者達は、Emily をきちんと埋葬するまで待たねばならなかった」のも、そこに入るために鍵の掛かった扉を破らねばならなかったのも、この事実直面する以上不可欠且つ不可避な一連の手続きである。遺骸の埋葬によって Emily という症状の消失せしめることと、「無意識の知」の開示、即ち「抑圧の解消」とは同義であり、従ってその開示自体は、本質的には亡き Emily にとってというよりは、寧ろ葬儀の参列者自身にとってこそ暴力的行為であるのだ。

従ってこの場面の重大性は、単に Emily と Barron の関係に纏わる謎の解決が齎されるということに終わらない。それは Emily の中に Jefferson の人々が見てきた南部家父長制という幻想の「父の法」の死、つまり彼女の父の死を通じて機能してきた、旧南部のロマンティックな幻想の消滅であると共に、その本質的不在の告知でもある。つまりこれは「死後も生き続ける父に自分が既に死んでいる」という事実を気付かせる決定的瞬間であると共に、このイデオロギーの下にあった南部自身が、この事実否認無く直面する瞬間なのだ。

そもそも Faulkner においてこの家父長制という「父の法」は、南北戦争という外傷的体験を経て措定された見せ掛けの秩序に過ぎない。南北戦争後の南部を、北部と言う「征服者」に侵略された被植民地的存在と捉える Charles Baker によれば、南部家父長制とはそうした過酷な現実を耐えるために生み出された神話的な（そしてそれ故本質的に不在の）過去である (11-53)。そしてこの捏造された過去が、自身の不在を隠蔽する南部神話形成の過程で、Emily という "a tradition, a duty, and a care; a sort of hereditary obligation upon the town ..." (119) の姿を採って理想化されたのである。Emily が頑なに父の死を否認したのは、彼女自身のためと言うより、寧ろ家父長制を（誤って）信じる語り手達の幻想を維持するためであったと言える。換言すれば、本作において家父長制とは、Emily によって支えられていると同時に、彼女という症状としてしか存在し得ないのだ。

同時に Emily も、登場人物としての実体を持たず、家父長制という幻想としてしか存在し得ない。Michael Millgate は、Faulkner がこの短編の手稿から Emily の死の床での台詞を削除したことに触れているが (23-24)、このエピソードが示唆するように、彼女は作者によって「自分を語るための言葉」を奪われているのだ。何より Emily の死と人々の会葬の場面から始まる本作が、その全編を通じて彼女の生涯を辿らねばその埋葬の場面に辿り着けないということが、Emily の存在によって示唆され且つ隠されてきた、抑圧された現実に対するテクストの深い葛藤と逡巡を暗示してはいないだろうか。

だが本作が Emily の死を告げる一文で始まり、再びその死に立ち戻ることで終わる以上、この現実の開示はいずれ不可避である。埋葬によって Emily という「症候」が失われた後、この寝室に横たわるものが、語り手達が直面する抑圧されてきたものの回帰の瞬間となる。生前の Emily を屋敷に束縛し、この街に君臨して来たかつての死父は、今や寝台の上で腐り果てた遺体の残滓に過ぎない。この屍体が生前 Homer Barron という英雄的な名を持つ北部の流れ者であったと推察されることは、逆説的に死父の本質的無意味さと匿名性を暗示する。Emily に対する彼女の亡父と Barron との類似と、そこに Emily の近親相姦願望を見る批評もある (Malin 48) が、それはこの二人の本質的同一性をも示唆する。今この寝室に侵入した街の人々が目の当たりにするこの正体不詳の物体こそが、Emily という仮象の向こうにある、遠い過去に滅び、朽ち果てた家父長制の現実の姿を表しているのだ。

この事実に対する語り手達南部家父長制の側の最後の抵抗が、この寝室の中に備え付けられた色褪せた婚礼の床の設えと共に言及される "the man's toilet things backed with tarnished silver" (130) と書いた、北部の流れ者 Barron を示唆する小道具なのかも知れない。だがこの引用の直後に続く "silver so tarnished that the monogram was obscured" (130) の句が示すように、それらに刻まれていたとされる Barron のイニシャルは、既に判別できなくなっている。繰り返せば、この最終場面で我々に読み取れるのは、Emily の父と Barron との区別が決定的に曖昧になってしまった事実以上のものではないのだ。

物語の最後でこの事実突き当たる時、我々は Emily の不在性の本質に立ち戻らねばならない。"[A Rose for Emily] came from a picture of hair on the pillow. It was a ghost story. Simply a picture of a strand of hair on the pillow in the abandoned house." (Gwynn and Blotner 26) という Faulkner 自身のコメントが示すように、"A Rose for Emily" は「廃墟の中の枕の上の一筋の髪というイメージから生まれた、一つの幽霊譚」に過ぎない。それは死んだ後も尚自分の死に気付かない「父」と、そうした死父の幻影に縋ることではか現実との折り合いを付けられない南部家父長制という、実態のない亡霊のような「男の欲望」の症候の物語であり、また、こうした欲望のために機能しなければならず、またそれ以外のために「存在」することを許されなかった^{サザン・ベル}淑女の亡霊の物語である。物語の最後に残る "a long strand of iron-gray hair" とは、こうした南部家父長制の終焉と、それを支え続けた「存在し(得)ない女性」の悲劇の、そして彼女を通じて描かれた男の幻想と暴力の痕跡を示す残余なのだ。

註

- 1 Faulkner の作品に窺われる、南部の「失われた未来」に対するヴィジョンと、その原因を社会的他者に投影する構造については拙論「失われた未来〈1〉Faulkner と他者—新世紀の批評に向けて—」を参照。尚、こうした南部特有のイデオロギ-的幻想について、上述

の論文及び本論稿は寺沢みずほの議論に多くを負っている。

2 Faulkner 作品に見られる南部イデオロギーについての定義と、その議論の詳細については、本稿は Miller の論に拠っている。

3 本短編のグロテスク性について、Dieter Meindl は Emily を Poe、Hawthorne、Melville 及び Anderson 等の作品の "grotesque death-in-life figures" (142) の一人と位置づける。また本作を、一種の恐怖小説と捉える批評家もいる (Howe 265、West 45)。また本作のストーリー及び舞台設定に関するゴシック的特徴については Horace Gregory や Danforth Ross が指摘している。

4 例えば Robert W. Hamblin と Charles A. Peek 編纂の *A William Faulkner Encyclopedia* は、"refusal to let go of the past" (332) を本短編の主要なテーマと捉え、多くの批評家が、Emily による父の死の否認、恋人 Homer Barron の殺害、彼女の階級意識や社会の変化を拒否する態度等を、南部の社会の特質を関連付けて議論してきたことを指摘する。Emily をこうした諸特徴の象徴と見做す読解については、例えば William T. Going や Hans H. Skei を参照。

引用文献

- Baker, Charles. *William Faulkner's Postcolonial South*. New York: Peter Lang, 2000.
- Brooks, Cleanth and Robert Penn Warren. "An Interpretation of 'A Rose for Emily.'" Inge 25-29.
- Claridge, Henry, ed. *William Faulkner: Critical Assessments*. 4 vols. Mountfield: Helm Information, 1999.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990.
- Faulkner, William. "A Rose for Emily." 1930. *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage, 1995. 119-30.
- Fetterley, Judith. "A Rose for 'A Rose for Emily.'" From *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Bloomington: Ithaca UP, 1978. Rpt. in Claridge, Vol. 4. 50-58.
- Freud, Sigmund. *Introductory Lectures on Psychoanalysis*. Trans. James Strachey. Ed. James Strachey and Angela Richards. The Penguin Freud Library. vol. 1. London, Penguin, 1991.
- . "Repression." 1915. *On Metapsychology*. Trans. James Strachey. Ed. James Strachey and Angela Richards. The Penguin Freud Library. vol. 1. London, Penguin, 1991.
- . *Totem and Taboo*. 1913. *The Origins of Religion*. Ed. James Strachey and Angel Richards. The Penguin Freud Library. vol. 13. London, Penguin, 1990. 43-224.
- Going, William T. "Faulkner's 'A Rose for Emily.'" Inge 54-55.
- Gregory, Horace. Rev. of *Collected Stories of William Faulkner*, by William Faulkner. *New York Herald Tribune Weekly Book Review* 20 Aug. 1950: 1-12. Rpt. in John Bassett ed. *William Faulkner: The Critical Heritage*. The Critical Heritage Ser. London: Routledge, 1975.
- Gwynn, Frederick L. and Joseph Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Charlottesville: U of Virginia P, 1959.
- Hamblin, Robert W. and Charles A Peek, eds. *A William Faulkner Encyclopedia*. Westport: Greenwood P, 1999.

- Howe, Irving. *William Faulkner: A Critical Study*. 1952. 3rd ed. Chicago: U of Chicago P, 1975.
- Inge, Thomas, ed. *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Merrill Literary Casebook Ser. Columbus: Bell & Howell, 1970.
- Malin, Irving. "Miss Emily's Perversion." 1957. Inge, 48-49.
- Meindl, Dieter. *American Fiction and the Metaphysics of the Grotesque*. Columbia: U of Missouri P, 1996.
- Millgate, Michael. "Revision of 'A Rose for Emily.'" Inge 23-24.
- Miller, J. Hillis. *Topographies*. Stanford: Stanford UP, 1995. 192-215.
- 森 有礼. 「失われた未来 〈1〉 Faulkner と他者—新世紀の批評に向けて—」『国際英語学部紀要』(2002), 1-23.
- Ross, Danforth. "From *The American Short Story*." Inge 61-61.
- Scherting, Jack. "Emily Grierson's Oedipus Complex: Motif, Motive, and Meaning in Faulkner's 'A Rose for Emily.'" *Studies in Short Fiction*. 17 (1980) : 397-405.
- Skei, Hans H. *Reading Faulkner's Best Short Stories*. Columbia: U of South Carolina P, 1999.
- 寺沢みずほ. 『民族強姦と処女膜幻想—日本近代・アメリカ南部・フォークナー—』東京: 御茶の水書房, 1992.
- West, Ray B. "Atmosphere and Theme in Faulkner's 'A Rose for Emily.'" *Perspective* 2 (1949), 239-45. Rpt. in *Claridge* Vol. 4. 43-49.
- Žižek, Slavoj. *Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture*. Cambridge: MIT P, 1992.

Synopsis

The Lost Future (2) :

The Return of the Repressed; The Patriarchal Fantasy in "A Rose for Emily."

William Faulkner's "A Rose for Emily" has been frequently considered as a story of the grotesque because of its macabre Gothic setting. Also, it has been discussed in the historical context of the South. These types of arguments are, however, apt to be a mere categorization of Emily Grierson, the protagonist of the story, as a mad woman, or to be a symbolization of her as a representative of the antebellum Southern plantocracy. As Judith Fetterley properly points out, these kinds of readings often end up with a repetition of cultural imperatives of the Southern patriarchy upon Emily. Based on Fetterley's feminist approach to "A Rose for Emily", this essay aims to give a psychoanalytic reading of this short story, especially focusing on the relationship between Emily and the Southern patriarchy.

First, I discuss the violent repression of Emily by the Southern patriarchy. Throughout the story, Emily serves as a kind of screen on which the male fantasy is projected. Idealized as a paragon of the antebellum Southern aristocrats through the "patriarchal lens" of the anonymous narrator, she allows the townspeople to project their nostalgic fantasy of the Old South. In reality, however, by "screening" the loss of the Old South, she functions both as an indication of the townspeople's ignorance of the loss, which they latently must be conscious of, and as a sign of repression of the lack of knowledge of the loss.

This lack of knowledge is supported by the symbolic father figure, represented as Emily's strict father, who, even after his death, seems to dominate Emily. However, his death is a mystery to the reader because he dies secretly in Emily's house. From a psychoanalytical viewpoint, ignorance of how one comes to know something is, in a sense, an inverted version of the lack of knowledge of the loss. According to Sigmund Freud, this irrational negation of one's own knowledge derives from ambivalence toward the primal father Freud mentions in Totem and Taboo; one wishes the death of the tyrannical father while fearing the loss of the father's law. Therefore, Emily's role to the townspeople is also quite ambivalent; they expect her to join to the new symbolic social code of their community, while that will bring about a catastrophe to the patriarchal South. Thus both physically alive and socially dead, she has to be a screen that maintains the male fantasy of the Old South.

With Emily's death, however, the male fantasy of the imaginary Old South comes to an end. With her burial, the townspeople come to face the reality which Emily has screened behind her. After the burial, they rush into her bedroom only to find the rotten corpse supposed to be Homer Barron, Emily's ex-lover, which Emily has long kept secret from them. At this moment, the townspeople's fantasy of the imaginary patriarchy breaks down and,

instead, they are forced to confront a formidable reality.

As Faulkner himself admits, "A Rose for Emily" is "a ghost story" in these two senses. In one sense, Emily has been permitted to be in this narrative world as an imaginary figure upon which the male fantasy of the townspeople is imposed and, by doing so, supports the ideological basis of the Old South. In the other sense, she is nothing other than a symptom of the repression of the loss of the patriarchal South and, as a logical consequence, once it is revealed, she must vanish as a specter does. The "strand of iron gray hair" left on the pillow is the only trace of the ghastly Emily.